

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成20年10月5日発行(毎月5日1回発行)
第48巻10月号(通巻591号)

風土



醉芙蓉
神蔵器

蟬一つ見てより蟬の穴無数

焙烙に胡麻のはねとぶ残暑かな

いちじく食ふ原爆の火の匂ひして

石ころに盆の過ぎたる風の吹く

鉛筆の頭の消ゴムや日雷

芙蓉咲く思ひ出す日が章鬼の日
子規庵の種より育つ鶏頭花
激雷や桂郎に面おもて当たられて
星となる夜の来て烏瓜の花
ふるさとや花掛け水の夜も鳴つて
燭消して妻をつれ出す良夜かな
待つひとのなくしておわらや酔芙蓉



竹間集

同人作品



蓮見小屋

大竹 淑子

朝涼の水飲んでより厨事
船鉾の裾幕に濤設しゅうせつらふる
町方は紺の着流し鉾の建つ
手熨斗屋の板戸立てたり鉾祭
山の田の細藺に澄みて糸とんぼ
藤棚の下や外寝まふしによき広さ
屋根は茅壁は蚕簿まふしに蓮見小屋

奈良扇

齊藤 小夜

奈良扇ひらけば友の声すなり
水無月や胸に秘めたる旅心
われ愛す青水無月の森のみち
激雷やタオルハンカチ手に握り
風を呼ぶ江戸風鈴に金魚の朱
人声に開けたる縁に円座おき
庭畑にもぎしを漬けむ茄子の紺

水無月

徳丸 峻二

池ながら動く水あり未草
人込みを日の斑ふすべらせ日傘行く
風鈴の鳴り癖妻の戻り来し
信長忌夕風に裾吹かれゐて
鶏小屋に高き鳴き声梅雨上る
からみあひ病葉降りなまこ壁
水無月や風に倒るる波頭

夏の果

宮川みね子

ことばにも表裏あり夏薊
青田風空ひろびろとありにけり
せせらぎの落ち合ふ四万六千日
炎天の石一つ積む遊女墓
七月や生命線のあざやかに
三四郎池くちなは波をたたみくる
一行書き一行削り夏の果

山の涼

浜 福恵

夏草や村に京極マリア伝
夕菅の花咲き継ぐや百日忌
卒哭の塔婆を抱き炎天下
虎杖の斑の衰注 百日忌の喪はついでにふや早梅雨
緑蔭や蔀を上げて持仏堂
馬頭観世音の小暗き山の涼
木もく穂げんじ子の花杲杲と休漁日

盆の月

鈴木とおる

吊しのぶ本郷西片学者町
梅雨明や長常口の草の丈
父母も妻も塔婆に雲の峰
金魚掬金魚掬ひに興じてよりの深眠り
涙目に玉葱きざむ男かな
こがね虫黒き涙を掌に残し
亡き人の後に坐り盆の月

藍浴衣

外川 玲子

扇面の筆勢梅雨の明けにけり
芭蕉堂天道虫のやうにゐる
みちのくの青田の先の句碑に逢ふ
束ねればくらさの添へり紅の花
尾花沢西瓜大きく切られけり
滴りや銀坑道に踏み入りし
ガス灯に橋の浮きたる藍浴衣

上州青梅雨

— 田村すゝむ —

富岡にて

梅雨雲に隠るる榛名妙義山
今は昔千の機織る梅雨館
蒸気抜く窓より梅雨の明りかな
時止めて梅雨千万の糸繰機
木もち骨この煉瓦造りの夏館
青梅雨の上州小幡城下町
青梅雨の水弾け合ふ芋車
夏燕行き来庄屋の忍び門
青梅雨の庄屋の大黒柱かな
鬼門てふ梅雨の裏門橋を抜け

山河集

同人作品



神蔵
器選

峰雲の真下キャベツの出荷どき
酢漿の爆ぜて咲きつぐ無言館
赤くあかく峽に梅干す平家村
機音に馴れし高声盆の来る
飽食の猫みてひとり冷素麵

小林 和子

滴りや二千余段の磴を踏み
ドヴォルザークのミサ曲大山蓮華咲く
灯のつかぬ石灯籠や吊忍
花莫塵や上り樞に下駄揃ふ
サングラス戦中戦後生き延びて

井上 あい

山国の民宿泊り明易し
豆飯や八十路の姉を訪ね来て
いつもより山の大きく夕焼す

十井 ゆう子

短夜や瞑りてラジオ深夜便
新館ホールに隣る図書館郭公啼く

奥山 絢子

炎天や仏に水を奉じけり
喪の家をねんごろに過ぐ祭笛
万緑の土新しき墳墓かな
木槿咲く黒姫山へ始発バス
母方は世を天領に青田風

岩田 都女

山滴る水辺に玉堂美術館
口中に含む梅干大暑かな
一斉に灯る電球鬼灯市
マジシャンの指より銀貨巴里祭
風鈴の江戸前の曲奏でをり

◇特別作品抄◇

鎌倉の四季

中沢三省

初蝶を追へば展ける源氏山
古刹より披講もれくる虚子忌かな
空をゆく風の姿の花吹雪
たかななに青き雨降る竹の寺
実朝の海を濡らして梅雨の月
極楽寺製薬鉢の蝸牛
塀のなき文士の庭や枇杷熟るる
江ノ電の大きく曲る野分かな

風土独語／神蔵器



後ろから顔を拭はる鉾の稚児

奥田 茶々

祇園祭の主役は、山鉾巡行に鑑いらずで毎年先頭を行く長刀鉾に乗りこむ、まだあどけない稚児である。正暦五年（九九四）から数年にわたり疫病が大流行した。朝廷もその対策に苦慮していたが、庶民が選んだ道は、稚児を疫神に奉げることによって、多数衆庶への疫神の魔心を鎮め、最少の被害で食い止めようとした。当時としてはそれしか方法は無かったのかも知れないが、選ばれた稚児、その両親たちの悲しみはいかばかりであったろうか。祇園祭は稚児を疫神に提供する親たちのやり場のない悲傷悲嘆が逆切れて度をすぎた華妍、綺羅錦繡の祭となり、耳を蔽う喧騒となった。つまり祇園祭は極度の悲しみ、怒りが神にすがる悲涙の地団駄祭だといわれている。

掲出句は山鉾巡行の途中の所見で、八坂神社の神域にかかる四条通り麩屋町での注連縄を切り放つ神事であろう。

この神事では、四条通りの人も車も一切の通行を遮断して、道幅いっぱい注連縄が張られる。つまり注連縄は神域への結界で、先頭を進む長刀鉾も注連の手前でピタリと止まる。

注連縄は広い四条通のこと、中央は大きくしだれている。先導の二人の人が、先が鉤になった長い竿をもって、注連縄をもち上げ、鉾の二階の稚児の前の台の上に注連の中央をかけ、据

える。

これより先、長刀鉾の稚児は、十一日の朝、行列をそろえて、八坂神社に参拝し神位神格が授けられている。この時、幼いながら稚児は十万石の格式を持ち、衣冠束帯に凛々しく威儀を正して玉座に在られる。やがて稚児は静かに立ち上がられると、黄金の刀を頭上いっばいに大きくふりかぶり一刀両断、見事に注連を切り放った。注連ははらりと両階に落ちて行った。拍手と喊声があがった。

次の瞬間、前乗の二人の、

ヨーイ、ヨーイ、エンヤラヤー

威勢のいい掛け声と共に、顔の前にあてた大きな扇子を思いきり前に二度三度突き出す。同時に鉦、太鼓、笛、コンチキチンと鉦囃子がいっせいに流れ、重さ十二トン、車輪の大きさに三メートル、京都人の技術と財力を尽した壮麗豪華な山鉾がゴットンと大きく一つゆらいで再び動き出す。気がつくとも屋根の上では、高さ二十四メートルとある鉾の先の長刀が、八坂神社に敬して正面から少し横に刃先を向けられている。

稚児の後ろには後見人というか、直接介添える人が二三人見られた。刀は少し離れたところから見たので正確ではないが、長さから見て脇差。勿論本身であり、注連縄の一番太いところを両断するのであるから本身でもなまくらである筈がない。鉾の二階でもあり大変危険であるので、この時の介添人は祭の役員であろう。しかし、後からそつと冷たいタオルを汗の稚児の顔にあててやったのは稚児の父親であったと思う。（以下略）

風土集



神蔵器選

鉾囃子まあるく月をそだてけり 東京

奥田 茶々

後ろから顔を拭はる鉾の稚児

大綱を曳けば月鉾立ち上る

早足で亡夫が近付く鉾囃子

病棟の願ひの糸の重さかな

盆棚を組み了へて見る前の山 いわき

木田 益穂

草刈女草を摺んで立ち上がり ひるよる

喜雨来たる声にならない声が出て

フアミリーの齒ブラシ多彩朝の虹

百間廊下一気の僧の素足かな 藤枝

間島あきら

凶書館の天へたかんな皮を脱ぐ

走り梅雨会所に大名渡渉の凶

駒鳥来女子大学のカフェテラス

枇杷熟るる武州橋樹市場村

没骨の墨の香にあり梅雨の月 大和 落合 絹代

底紅や母の抽出しそのままに

ルノワールの少女と紛ふ夏帽子

繻くは 国宝 仏集夜 の秋

肝心の話を逸らす扇子かな 上尾

根岸 善行

香水のさりげなく席はづしけり

星一つ先に上げたり夏の月

雨後のどの家にも夕焼明りかな

髪刈つて髪が貼りつく大暑かな

夏草ヘレールが錆びてゆきにけり 横浜

近藤幸三郎

白百合や絹本綴りの来迎図

ゴスペルを歌ふ牧師のサングラス

樹木医の木を抱きしめる大暑かな

しなやかに向う岸へと蛇泳ぐ 生と無の篆書屏風や秋隣